

## 論文の内容の要旨

論文題目 一なるキリスト・一なる教会：12世紀ビザンツ＝アルメニア教会合同交渉とネルセス・シュノルハリのキリスト論

氏 名 濱田 華練

本論文は、ビザンツ皇帝マヌエル1世コムネノス（1118-1180）治世時のギリキアにおいて、1165年から1173年までビザンツ・アルメニア間の教会合同をめぐる一連の交渉・議論にアルメニア側の代表として参加したアルメニア教会カトリコス／総主教にして神学者であるネルセス・シュノルハリ（c.1102-1173）の生涯と思想を研究の対象とする。ネルセス・シュノルハリは、アルメニア教会の首長（カトリコス）として、バグラトゥニ朝アルメニア王国の崩壊（1045年）により世俗の君主を失ったアルメニア人社会を導く立場にあっただけでなく、数多くの優れた韻文を著した詩人としてもアルメニア文学史にその名を刻んでいる。また、教会合同に関して彼がマヌエル1世に書き送った書簡は、アルメニア教会の最も優れた護教論の一つに数えられており、その神学者としての能力もアルメニア教会内外で高く評価されてきた。

アルメニア教会は、6世紀にカルケドン公会議の否認を宣言し、コンスタンティノーブルとは袂を分かち形になったが、その後もビザンツ・アルメニア間では教義をめぐる論争が繰り返されてきた。そうしたビザンツとの教義論争で活躍したアルメニア人神学者の多くは強固な反カルケドン主義に基づく護教論を展開したのに対し、ネルセス・シュノルハリは積極的にカルケドン派に歩み寄ろうとした。とりわけ、カルケドン派と非カルケドン派のあいだで最大の争点とされる「キリストの神性と人性の合一」に関する教理的表現の問題について、アルメニア教会が奉じる「受肉したロゴスの一なる本性」という表現と、それと対立するカルケドン信条の「一なるヒュポスタシス（ペルソナ）における二つの本性」という表現は、一方が真で他方が偽という二者択

一ではなく、ロゴスの受肉という本来語りえざる真実を言語化する上で相補的な関係にあり、共に教義として有効であるという主張を展開した。このネルセスのキリスト論をどのように評価するかは、特に神学の分野においては、研究者自身が教義上での立場を「正統」とするか左右されてきた面がある。アルメニア教会に属する神学者・歴史家は、ネルセスが一貫してアルメニア教会の伝統を堅持したことを主張する。それに対して、正教会やアルメニア・カトリックなどカルケドン派の側に立つ研究者は、ネルセスは議論の過程でアルメニア教会を擁護しながらも、最終的にはカルケドン主義を完全に受け入れたと解釈している。さらに、現代以降広まったエキュメニズムの思想に立脚する研究では、ネルセスのキリスト論は、教理的表現の相違にとらわれない「多様性の中の一致」を目指すエキュメニズム的理想を体現するものとして評価されている。しかし、いずれの立場も、研究者にとっての「正統」の文脈からネルセスを評価したものであり、彼自身がどのような「正統」意識に立脚していたか、そしてその「正統」の文脈の中でどのような論理展開によって「一なる本性」と「二つの本性」の双方が教理的表現として正しいという結論に至ったかということについては、未だ明らかにされていない。

上述の点をふまえて、本論文は、ネルセス・シュノルハリのキリスト論について、以下のようなアプローチからの研究を試みる。1) ネルセス・シュノルハリが、教会合同の議論に携わる前と後で、どのような思想的変化を経たかについて明らかにするため、彼の生涯と作品を年代順に追う。2) 教会合同問題が提起された際にネルセス・シュノルハリが置かれた立場を明らかにしつつ、それが彼の神学上の立場にどのように影響しているか、あるいは影響していなかったかを明らかにする。3) ネルセス・シュノルハリの世界観と、それがどのようにして彼のキリスト論として結実しているかを分析する。

こうした課題を解決するため、筆者は本論文を大きく第1部と第2部に分け、第1部において教会合同に携わる前のネルセス・シュノルハリの生涯とその思想的発展を、当時アルメニア社会が置かれていた「分裂」状態とその克服という観点から論じ、第2部において教会合同をめぐる議論の進展とその中で展開されたネルセス・シュノルハリのキリスト論について論じる。まず、第1部第1章では、ネルセス・シュノルハリの出自と歴史意識について、『叙事詩』(1121年)と題された彼の長編詩に基づいて分析した。ネルセスを輩出したアルメニアの名家パフラヴニ家は、4世紀初頭にアルメニアをキリスト教化した聖人であるグリゴル・ルサウォリチの末裔を自称し、11世紀半ばから13世紀初頭までおよそ140年間にわたってカトリコス座を独占してきた。そうした出自を背景にもつネルセスは、上述の『叙事詩』において、地理的・政治的に分断されたアルメニア人社会を「グリゴル・ルサウォリチの後継者」が一つにまとめ上げるという理想を描き出した。続く第2章では、ネルセスが教会の分裂状態、そしてその克服という課題についてどのように考えていたか、彼の代表作の一つである『エデッサの哀歌』(1145-6年)を中心に明らかにする。12世紀の東地中海世界では、アルメニア・シリアの非カルケドン派キリスト教徒とカルケドン派のビザンツとの対立に、十字軍の到来によってラテン・カトリックという新たな軸が加わった。1130年代後半のヨハネス2世コムネノスのキリキア侵攻によりビザンツへの不信感を強めたアルメニア教会は、ラテン・カトリック教会との協力の可能性を模索していた。1145

年のザンギーによるエデッサ陥落を題材とした韻文『エデッサの哀歌』において、ネルセスは「西方」すなわちローマからのキリスト教徒の軍勢がエデッサを奪回する展望を語るとともに、最初のキリスト教君主として知られるアブガル王の伝説をもつ都市エデッサを舞台装置として、かつての「全地教会」の記憶を呼び覚ますことで、分裂状態にある教会に「一致」のビジョンを示そうとしている。しかし、そのような楽観的な期待とは裏腹に、第二回十字軍が失敗に終わったことは言うまでもなく、1150年にネルセスはルーム・セルジューク朝の侵攻を受けてユーフラテス川西岸のフロムクラ（現トルコ共和国ルムカレ）へ避難し、その結果キリキアのアルメニア人コミュニティから孤立することになった。これまでネルセスが描き出してきた「分裂から一致へ」の道は、「歴史」の必然としてもたらされるマクロなレベルでの救済の希望によって裏打ちされていたが、アルメニア人社会から切り離され、同胞たるキリスト教徒からの援助も期待できないという現実を目の当たりにし、もはやそのような希望を抱くことは難しくなった。第3章では、そのような状況に置かれたネルセスの文学的関心が、人類あるいは教会・民族の歩みとしての「歴史」から、「信仰」へと移っていったことを、フロムクラ時代に書かれた彼の韻文や書簡の分析を通じて明らかにした。ここにきてネルセスは、「正統な信仰」とは、各人が「神が常に近くに在る」ことを信じ、一人一人が神の前で主体的に善をなすことであるという境地に至った。

第2部では、1165年以降のビザンツ・アルメニア間の教会合同をめぐる議論の進展と、そこで展開されたネルセスのキリスト論について論じる。まず、第2部第1章では、教会合同交渉時にネルセスが最も重要視したのは、ビザンツによる武力の行使を避けることであった点を明らかにした上で、このネルセスの「外交的配慮」が彼のキリスト論に影響しているか否かという問題提起を行う。続く第2章では、カルケドンのキリスト論と非カルケドン派のキリスト論の相違について検討した上で、ネルセス・シュノルハリの1165年以前と以後のキリスト論を比較し、上述の「外交的配慮」が彼のキリスト論に根本的な変質をもたらしたわけではなく、むしろネルセスはアルメニア教会の伝統的キリスト論に立脚していることを指摘する。そして、第3章では、ネルセスのキリスト論について、彼の人間論、宇宙論そして教会論との関わりにおいて論じる。ネルセス・シュノルハリの世界観では、人間は「魂と肉体」という全く性質の異なる「二からなる一」であり、そして物質世界もまた互いに相反する性質をもつ元素が結びついて成り立っており、そうした種々の「二（あるいは多）からなる一」は、神性と人性という決して交わることはないはずのものを結合させた究極の「二からなる一」であるキリストの存在に包摂されている。そして、分かれた教会が一となることもまた、キリストが「相反する二を一とした」という動かざる真実によって保障されている。しかし、キリストが人間への限りない愛によって神から人間となったように、教会が一となるには、互いに対する愛が不可欠であるとネルセスは主張する。

以上のことから導き出される結論としては、ネルセス・シュノルハリは、一連の教義論争の中でキリストの存在について客観的に定義する体系に何らかの新機軸をもたらしたわけではないが、教理的表現における相違をも乗り越えて教会が一となりうる確固たる根拠として他ならぬ「キリスト」そのものを置いた。同時に、ネルセスにとって教会合同とは、愛によって神性と人性を結びつけた「一なるキリスト」を目指すことであった。教会の分裂を克服する上で、どちら

かが一方的に合同の条件を受け入れるのではなく、双方が「キリストを目指して」、「キリストによって示された愛」を主体的に働かせることの必要性を説く教会論と一体となったキリスト論は、様々な「分裂」をはらんだ現実と格闘しながら、それらの分裂を克服する道として、一人一人の人間が神と主体的に向き合うという信仰の在り方へと至ったネルセスだからこそ生み出すことができたものといえる。